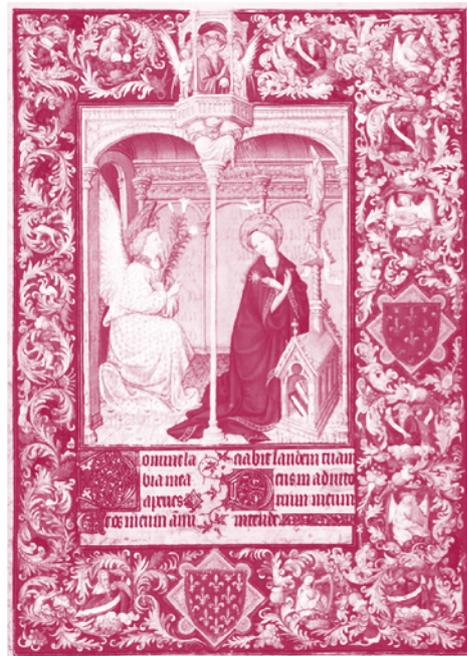


# Newsletter 25

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第25号 / 2014年11月30日発行

## Contents

- 巻頭言 所長就任にあたっての抱負
- 特集I 「情報の教養学」
- 特集II 実験する学び「日吉学」 / 「実験授業：古典ワークショップ」
- 特集III 「学びの連携」、「学習相談」
- 特集IV 「庄内セミナー」、「カドベヤ」
- 特集V 研究サポート「研究の現場」から  
川添美央子 / 近藤康裕 / 鎌田由美子 / 荒金直人
- 活動予定 11月～2015年3月、日吉キャンパス公開講座  
私の〇〇自慢



## 所長就任にあたっての抱負

教養研究センター所長  
小菅隼人 (理工学部)  
Hayato Kosuge

10月より新しく教養研究センター所長に就任することになりました理工学部の小菅隼人です。私は、これまで、日吉行事企画委員会（HAPP）の委員長として教養研究センターに関わってきましたが、不破有理先生の見識と行動力を思うにつけ、「自分などにこの重職が務まるのだろうか」という思いが湧いてきます。しかし、今回、大出敦先生、片山杜秀先生、工藤多香子先生という心強い三人の副所長もおられますし、コーディネイトオフィスの先生方を始め、長年一緒に研究教育に携わってきた日吉の同僚たちもおられますので、そのお力とご助言をいただきながら、微力ながらベストを尽くそうと思っています。何卒よろしくお願ひいたします。

教養研究センターはこれまで、様々な内容と方法で新しい教養教育の実践に取り組んできました。そこでは、「アカデミック・スキルズ」のように各学部の総合教育科目と同一の内容と目的を持ちつつ新しい方法での初年次教育を展開しているものもありますし、さらに、「日吉学」や「身体知」のように学部教育でこぼれ落ちた分野を掬いあげるもの、「生命の教養学」や「情報の教養学」のように従来の科目群では追い付いていけない新しい分野に取り込んでいくものもあります。また、公開講座、公開講演会のように地域連携に積極的に取り組んでもきました。理想の教養教育の方法と内容

を、実践によって模索することは、当センターの大きな役割であり、これからもさらに積極的に取り組んでゆきたいと思います。

さて、これらの教養教育に加えて、以下、新所長として新たに展開させてゆきたい活動について述べさせていただきます。

最初に、私は、教養教育に加えて、「教養研究」を教養研究センターの中心的な活動として展開してゆきたいと考えています。これまで教養研究センターに関わってきて、実にしばしば、「教養研究センター」が「教養教育センター」と誤って呼ばれたり、「教養センター」と短縮して呼ばれたり、「日吉の教養センター」と短縮かつ修飾語をつけて呼ばれたりする場面に遭遇しました。そこではいずれも「教養」や「教育」という言葉に重点が置かれ、「研究」という言葉は忘れられているか省かれています。これはたいへん残念なことと感じています。そもそも、なぜ、教養を研究する組織が大学に必要なのでしょうか。それは、「教養」が人間にとって必要なものでありながら、いまだその形式も機能も目的も性格も明確に答えられた人がいないからです。例えば、マシュー・アーノルドは *Culture and Anarchy* (1882) において「教養」を「文化」(Culture) と捉えました。また、T. S. エリオットは、“What is a Classic?” (1944) というエッセイの中で、「教養」を「成熟」(Maturity) という言葉で表しました。さらに福澤先生の言う「学問」の勧めは、まずは学ぶ姿勢の奨励という意味で「教養」の勧めであると私は捉えています。いずれも、「教養」を直観的に規定したのですが、教養研究センターの最大の目的は、「教養とは何か」「教養はどのような役割を果たすのか」「教養は何のために必要か」という疑問に明確な答えを与えられるだけの研究を行うことだと私

は思っています。ネット検索をしてみますと、多くの日本の大学に「教養教育センター」が設置されているのが分かります。しかし、慶應義塾大学以外に「教養研究センター」が設置されている大学を私は見つけられませんでした。おそらく日本で唯一の教養のための「研究」センターではないでしょうか。そこには、教養の輪郭を示し、その意義を明らかにするという大きな使命が課せられていると思います。

次に、教養教育、教養研究と並んで、「連携交流」を積極的に展開してゆきたいと思えます。「連携交流」は、教養の「方法」であると同時に教養の「内容」でもあります。教養が「身につけられる」ためには、知識として得たことを自発的に発信し、その反応を受信するという経験の中で定着させる必要があります。それは、広い意味での「社交」と言い表すことができます。もちろん、これまで教養研究センターでは、HAPP、三田の家、カドベヤ、日吉キャンパス公開講座、さらに、基盤研究においても地域連携の実験的実践や研究は行われてきました。むしろ、それが教養研究センターの大きな特徴と捉えられてきました。今後はこの連携交流を、慶應の周辺地域を超えて拡大し、しっかりとした教育・研究としてのフレームワークを与えつつ、他センター・研究所などと連携して展開してゆこうと思えます。山崎正和の『社交する人間：ホモ・ソシアビリス』を援用すれば、人は行動することによって自分のしたかった内容に気付くのであり、それ以前にあるのは何かをしたいという漫然たる気分に他なりません。内面が先にあるのではなく、行動によって、逆に形を与えることで、内面を形成されていくと言えます。そして、その根源は本来的に相互作用をする個人であり、相互作用そのものと言えます。この「社会化作用」が教養という内的行為の根源にあると私は考えています。これについては、羽田功元所長のご努力下、「庄内セミナー」という非常に意義深い実験的試みが行われています。それを足がかりに、人および場所との相互作用としての教養のあり方をさらに拡大して模索し、実践し、蓄積してゆきたいと思えます。

最後に、これらの研究教育の実験実践の場として、また、自発的な経験を実現する場として、プログラムの構築のみならず、

具体的な施設として、慶應義塾の中に新しい教養の拠点が必要だと私は考えています。かつて、駒場小劇場は夢の遊眠社を生み、SCOTの源流に早稲田小劇場があり、芝居好きの神父様が一夜にして講堂を小劇場に変えたという伝説が上智小劇場にはあります。また、慶應義塾大学のような日本を代表する教育機関の中に一つも映画上映専門施設がないのはおかしいね、と小栗康平監督に指摘されたこともあります。小劇場、映画館、ダンスのリハーサルやワークショップができる板張りのアトリエ、展示とパフォーマンスができるギャラリーを合わせ持った「慶應アーツシアター」は、教職員と学生が一体となって教養の形と意味を追求するための拠点として必須のものと思っています。これは、私が演劇に夢中になっていた学部生時代からの夢でしたが、塾派遣留学でケンブリッジ大学に滞在中、経済学者のジョン・メイナード・ケインズが肝煎りとなって設立されたケンブリッジ・アーツ・シアターに通いつめ、また小規模ながら非常に質の高いギャラリーとして活動しているケルズ・ヤードにボランティアとして関わった時に、このような施設が大学にとって必須なものであることを確信しました。

私は、教養は、医療と同じく、それが人々にとってなくてはならないものであると同時に、社会全体にとってもなくてはならないものだと思っています。教養は、とかく役に立たない雑学に類するものと見なされることが多いですが、それは間違っています。かつて、全てを奪われ監禁された南アフリカの政治犯が、音楽、美術、演劇、文学などの教養（Humanities）が、人間にとって不可欠なものであり、「食べ物よりも重要だったことを確信した」というエピソードを聞いたことがあります（デイヴィッド・シャルクウィックによる国際演劇学会での基調講演、ウォリック大学、2014年）。また、日本における2013年の自殺者は年間約2万8千人です。交通事故死亡者が約4千3百人であることを考えれば、豊かな精神の涵養は、すでに生死の問題とも言えるのです。教養研究センターは、教養とは何かという問題について正面から向き合い、実践的に教養研究を展開し、それを広く社会に公開してゆかなければなりません。改めてご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。



左から、大出敦先生、小菅隼人先生、工藤多香子先生、片山杜秀先生

# 情報の教養学

## データから情報へ

世の中には様々なデータが氾濫しています。それらの多くはそのままでは役に立ちませんが、加工を施すことで、意味のある有用な情報に生まれ変わります。昨今話題の「ビッグデータ」においても、データに検証の手を加えることによって、次々と新たな知見が導き出されています。2014年度の「情報の教養学」では、様々な分野の一流の講師を招き、「データ」を「情報」に変えたときの新たな発見や研究に関する話をさせていただいています。テーマは、脳（茂木健一郎（ソニーコンピュータサイエンス研究所））、サッカー（永野智久（総合政策学部））、貧困（新保一成（商学部））、データジャーナリズム（藤代裕之（NTTレゾナント））と赤倉優蔵（日本ジャーナリスト教育センター））、テキストマイニング（河野武司（法学部））、電子商取引（平手勇宇（楽天技術研究所））と、多岐に渡っています。春学期・秋学期を通じて合計6回の講演と1回のワークショップを開催しています。（高田真吾）

**データでサッカーの見方がどう変わるか!?**

開催延期のお知らせ

講演会の日程が6月4日(水)に変更となりました。

5月28日 → **6月4日(水)**

永野智久  
Tomohisa Nagano

《情報の教養学》春学期講演  
慶応義塾大学 図書館研究センター  
講師：永野智久（慶応義塾大学総合政策学部）  
日時：6月4日(水) 16:30~18:00  
会場：日吉キャンパス東館1階 シンポジウムスペース  
予約：無料・要予約  
問い合わせ：03-5480-2000  
http://lib.arts.keio.ac.jp

15.1%  
11.7%  
29%  
21.6%  
1IN5

**データで貧困を考えよう**

新保一成

6・19

講師：新保一成（慶応義塾大学商学部）  
日時：6月19日(木) 16:30~18:00  
会場：日吉キャンパス東館1階 シンポジウムスペース  
予約：無料・要予約  
問い合わせ：03-5480-2000  
http://lib.arts.keio.ac.jp

データジャーナリズムがもたらすニュースの革新

10月22日(土) 16:30~18:00  
講師：藤代裕之（NTTレゾナント）  
会場：日吉キャンパス東館1階 シンポジウムスペース  
予約：無料・要予約  
問い合わせ：03-5480-2000  
http://lib.arts.keio.ac.jp

**DATA JOURNALISM**

社会の課題を伝えよう！  
データジャーナリズム実践講座

10月25日(日) 12:00~18:15  
講師：赤倉優蔵（日本ジャーナリスト教育センター）  
会場：日吉キャンパス東館1階 シンポジウムスペース  
予約：無料・要予約  
問い合わせ：03-5480-2000  
http://lib.arts.keio.ac.jp

Too Big To Know?

計量テキスト分析のすすめ

11月27日(木) 16:30~18:00  
講師：河野武司（慶応義塾大学法学部）  
会場：日吉キャンパス東館1階 シンポジウムスペース  
予約：無料・要予約  
問い合わせ：03-5480-2000  
http://lib.arts.keio.ac.jp

## サッカーのデータを見るから使う時代へ！！

データを獲得の歴史が浅いサッカーですが、欧米を中心に最新の技術が導入され、ピッチ上の選手、ボールの動きを常にトラッキング（追尾）する時代になりました。ワールドカップではそのデータを情報として取り入れ、戦術にまで落とし込んだドイツが見事に優勝しました。その手法はサッカー界に大きな影響を与えるはずですが、試合に限らずトレーニング中の選手の動きや心拍までもトラッキングするアマチュアクラブもあります。一方で、サッカーを見る人の目もデータや情報に馴染みつつあります。試合後にデータを交えて解説するメディアも増えました。今後、データを獲得するための技術はますます進歩するでしょう。誰でも自分のデータをプロサッカー選手と比較することができる時代になります。ただ、データはあくまで数字、その数字をどう料理して意味のある情報にし、知識として蓄え、誰でもが活用できるよう整備できるかどうか、これからの課題も山積みです。（永野智久）

## 計量テキスト分析のすすめ

今日様々な現象を実証的に説明するために、データが蓄積されて分析されるのを待っています。それは数値型データに限らず、テキスト型データについても同様です。例えば、新聞記事や国会議事録、さらには世論調査の自由回答などです。かつては紙として保存されていましたから、これらを用いた研究では、もっぱら人力に頼る他なく、多大な労力と時間を要しました。また分析にあたってはコーディングという人の判断が入るために、同じデータと方法を用いれば誰が何処で何時分析しても同じ結果が得られるという意味での信頼性の確保が常に問題となりました。しかし今日では、コンピュータの飛躍的な性能の向上と多様なテキストマイニングソフトの開発とが、データベース化されたテキスト型データの、迅速かつ信頼性の確保された分析を可能としています。今回は、研究者にとって宝の山と言ってよいテキスト型のビッグデータをいかに分析するかについて紹介しました。（河野武司）

## 実験授業「日吉学」

### —「想像的・創造的構成力」のすゝめ

情報があふれる現代だからこそ、「自身の見識で発見し、選択し、咀嚼し、再構成し、発信する総合的な力」が必要であり、そのような「創造的構成力」が教養であり、そのような教養があつてこそ、分裂しがちな「心」と「頭」と「体」が統合されよりよく機能するのではないか、そのためには学んで問うことが必要である、とは教養研究センターの生みの親である湯川武先生の言です。もしかすると、「日吉学」とはそのような教養の力をつける授業になるのではないかという予感と期待を抱いています。日吉の歴史・自然・地形・地理の講義と観察体験とグループワークと討議を通して、自らの発見を一貫校生も交えた多様な学生同士で共有化し考えをさらに深めまとめ発信する、このような一連の知的行程を辿る学習プログラムとして育てることができれば、教養研究センターが目指す座学と身体知の統合による言語知の育成にもつながることを期待しています。2014年度は7日間28時間（4月26日～6月28日）にわたり、森を探索し自然の多様性を知り、等高線のみで地形図を前に地図とは何かを問い、地下壕や学生寮に残された過去からのメッセージを読み心に刻みました。「こんな授業があるといいな」という思いを受け止め、実現してくださった先生方、センターのスタッフのみなさん、本当にありがとうございました。（不破有理）



### 個人のアイデアを融合して革新的なアイデアを生み出すには？

日吉学では、参加者がグループになってフィールドワークを行います。同じものを見たり、聞いたり、触ったりしたとしても、得られる気づきやアイデアは様々です。第1回には20名以上の学生と教員が参加し、ワークショップによってその個々の気づきやアイデアを融合し、革新的なアイデアを生み出すことに挑戦するために「アイデアを拡げ、磨き、集合知にするプロセスと手法」を体感頂きました。まず、日吉キャンパスで創出する「遊び」と「学び」について、グループでアイデアを出し合いました。その後、それらのアイデアが実現できそうか？ 新たなアイデアはないか？ を検証するために日吉キャンパスを歩き、カメラ撮影するフィールドワークを行いました。そして、撮影した写真や気づきのメモを日吉キャンパスの航空写真上に貼り、更にアイデアを出し合い、それらを構造化しました。最後に、実際に新しいアイデアが実現した場合のストーリーを創造し、そのストーリーをスキット（寸劇）やグラフィックによって参加者全員で共有し、ワークショップを終了しました。世代や興味、専門が異なる参加者がワークショップを行う事で、思いもよらないアイデアが生まれることを体感しました。（神武直彦）

# 実験授業 「日吉学」

### 日吉の森

第2回と第3回は、日吉の森（日吉の森）を理解するプログラム。日吉の森のホットスポットを探そう。日吉の森の生き物が最も賑わう場所を探そう。野草やシダ、コケ、虫など、生き物を担当し、それぞれの生き物を観察しました。最後はグループで日吉の森のホットスポットを決めました。通して、生き物の集まる場所を理解できたと思います。

第3回は「日吉の森のランドマーク」というテーマで、日吉の森の特長を探そう。この日もグループに分かれてフィールドワークを辿って、自然風景を探そう。日吉の森の自然や建物の中で、面白い場面を見つけ、デジタルアートに戻り、各グループの推薦作品を発表しました。楽しむ「日吉の森のランドマーク」。

各回とも参加した学生の感想を聞きました。最後のまとめまでスムーズに終わりました。ただ、初めてのフィールドワークの時間配分が上手いかなかなど、課題でした。

## 【実験授業：古典ワークショップ】

### 「から騒ぎに大騒ぎ」——シェイクスピア・ドラマ・ワークショップ第6弾

昨年に引き続き、好評であったシェイクスピア・ワークショップを、オクスフォード大学ニール・マクリン教授を講師に、今年はアンナ・マルモード（法学部）もお迎えして11月1日と2日に開催しました。昨年は「ジュリアス・シーザー」で人を扇動する演説の恐ろしさや人間心理の変化を身体で表現する。後には結婚するという恋愛喜劇。四部構成のプログラムで、まずは身体と声を使うウォーミングアップののち、登場人物の上下関係を発声と表情で表現。初日から覚醒させました。そのうえで、セリフの表現方法や空間の使い方を学び、登場人物の分析へと移ります。喜劇の中の悪人をシェイクスピア風に演じるにより、対人関係も自然に学ぶことになります。国際センターによる夏季プログラムに参加した学生たちがワークショップにも参加し、現地



## 学びの連携

### 新たな挑戦とさらなる展開へ

3年目に入った「学びの連携」では、新たな試みとして「本の世界への探索法」ワークショップを企画しました。和洋の古い書物に直に触れ、形態、用紙、文字など、書物のモノとしての様々な特徴に注目すると、本に関わった人々の思いや時代状況など豊かな世界に触れることができます。本ワークショップはそのための目のつけ所を知り、本との接し方を体得することを目的としました。ITの進展により、デジタル化された情報が溢れる現在、我々とはもすれば知識を情報としてのみ考え、本来それを取り巻いていた様々なモノとコトを忘れがちです。モノ自体に触れることによって、バーチャル化された情報だけでは知り得ない様々な事柄を体感とともに知る、その大切さにふたたび目を向ける必要があるでしょう。本ワークショップはその一つの試みです。

ケース・メソッド、システムズ・アプローチなど、主に社会科学系の教育の場で開発されてきた教育メソッドを体験するワークショップも引き続き行っています。11月8日には、法学部の田村次朗氏により、「ケース・メソッドによる交渉力体験ワークショップ」が開催されました。1月24日には、SFCの井庭崇氏によるパターン・ランゲージのワークショップを開催する予定です。創造力・協働力を育む教育メソッドを、学問分野やキャンパスの違いを超えて共有し、慶應義塾の教育力をより高めることをめざし、「学びの連携」は今後も様々な取り組みに挑戦していきます。(種村和史)



### 「本の世界への探索法」ワークショップ開催

梅雨明け前の土曜の午後、2014年の7月5日、日吉キャンパス来往舎の一室で、標題のワークショップが開催されました。この会合は、前半の和本の部と後半の洋書の部に分かれ、前半は住吉朋彦（斯道文庫）と一戸渉氏（同）が担当し、後半は徳永聡子氏（文学部）が講師を務めました。この計画の狙いは、実際に質量を有ち、相応の時間を経て現前する、ものとしての書物を読み解くことにありました。当日は募集に応じて下さった14名の参加があり、講師の用意した江戸時代の和本や、装飾写本以来の貴重な洋書に、慎重かつ熱心に触れ、それぞれに考えをめぐらしました。書物に触れる時間を大切にするため、書物の画像を用いた課題を事前に解き、会場では原本との違いも感じながら、テキストを育んだ状況に通ずる回路をあちこちと探り、講師の案内を聴いて頂いたことは、書物との関わりを有つ上で、いく分か意義があったのではないかと感じています。

(住吉朋彦)

## 学習相談

### 2014年度春「学習相談アワー」活動報告

学習面で悩む塾生に、同じ塾生が相談にのる取り組み、「学習相談アワー」。今年度からは、活動場所が日吉図書館内「レファレンスデスク」から、「スタディ・サポート」と名称変更し、図書館スタッフとITC スチューデントヘルプデスクのスタッフとともに、塾生を支援する体制を強化しました。春学期（5月7日～7月21日）の相談件数は309件で、この期間としては過去最も多い件数となりました。終了時間を30分延長し18時半まで相談を受け付けることで、5限後まで勉強する学生にも相談しやすくなるような体制をとっています。また、相談活動以外にも、毎年好評のレポートの書き方講座（6月4日、13日）や展示企画「正しいレポートの書き方は、あります!」（6月16日～7月30日）にも取り組み、悩みを解決する機会を広く提供しています。(川本真梨子)

### 基礎の基礎を伝えるレポート講座

レポートの課題を出されたが、何を書けばいいかわからない。字数は埋められるが、それで大丈夫だろうか。新入生の誰もが抱く困惑を、日吉では一対一の学習相談を通じて解消が試みられてきました。6月に開かれたレポート講座もまた、そうした日吉の学生を支援する試みの一つです。今年度は、日頃特に相談の多い「テーマの決め方」と、「書式・構成の作り方」の2つに内容を分けました。一年生を中心に、両日合せて50名以上の学生が参加しました。一対一とは異なり細かい対応はできませんが、具体例を用いつつなるべくどのようなレポートにおいても活用できる技術を伝え、個別の質問を受け付ける時間も設けました。秋学期には要望が多かったプレゼンテーションや、上級者向けのレポート講座を開設し、企画のいっそうの充実を図っていきたいと思います。(法学部政治学科4年 辛宇華)

### 「ダメレポート脱出法」公刊! 皆様に感謝!

『学生による学生のためのダメレポート脱出法』がよいよ公刊の運びとなりました。学習相談の蓄積をもとに学生目線の本を作ろうと企画が立ち上がったのが2012年。足かけ3年の大事業となってしまいました。辛抱強く待ってくださった先生方、出版会の方々には頭が上がりません。日吉メディアセンター職員の皆様にもお世話になりました。本当にありがとうございました。

そしてまた、これまでの相談に来てくれた、のべ千人超の皆様にも、この場を借りて感謝申し上げます。この本は、多くの学生の悩みから出発してできあがりました。自分自身の悩みを解決しようとして相談に来てくれたことが、学習相談員に刺激を与え、アドバイスを引き出し、その蓄積が他の学生の悩み解決にもつながっているわけです。相談に来てくださって、ありがとうございました。

今後も学習相談の活動をどうぞよろしくお願い致します。

(社会学研究科博士課程3年 間篠剛留)

## 第5回庄内セミナー

今回のテーマは「生きることを考える—庄内に学ぶ生命」。初日の夕講では化学者・井奥洪二先生のお話に学生は「鳥肌が立つ」ほどの刺激を受け、二日目は即身仏拝観と注連寺住職佐藤弘明氏のお話と三日目の修験体験と鈴木正崇先生の講義の齟齬に揺さぶられ、松ヶ岡開墾場では庄内藩酒井家の忠順氏と遭遇、藩校・致道館では庄内論語の素読を大声で体験、夕講には18代当主忠久氏と東山昭子氏からの庄内の歴史と風土と言語のお話を伺い、ただち豆の芳香と御国ことばに酔いました。庄内の土地だからこそ心と身体を揺さぶられる多くの体験をさせていただき、学生は「生命とはなにか」という根源的な問いを全身で考えることができました。講師の皆さまと榎本政規市長をはじめセミナーにご協力くださった鶴岡市の皆様、先端生命科学研究所の皆様にご心より感謝いたします。\*セミナーの様子は慶應義塾DMCの撮影編集によりYouTubeに公開予定。(不破有理)

### 「生命」を学ぶ

作家・森敦の『月山』では、月山は死の山として捉えられています。これは森敦の文学的創作というよりも、月山に祀られる仏が阿弥陀如来であることが示しているように、庄内平野の人々が古くより抱いてきた観念であったのでしょうか。人は何故死ぬのだろうか。死んだら人はどこへゆくのだろうか。そういう素朴な疑問が、月山をして死の山とよばせました。死者の霊魂は月山の峰に集まりますが、この死の山から流れ出る水は、庄内平野を潤し生命を育ててゆきます。生の根源は死であり、この二つは循環するものとして捉えられているのです。第5回庄内セミナーでは、庄内の古い生命観（修験、即身仏）と新しい生命観（慶應義塾大学先端生命科学研究所）を同時に学びながら、出羽三山の山懐で討論を重ねてきました。「生命」という主題は、生は死によって裏打ちされるという観念が息づくこの場所であったからこそ、深く、また鋭い感性で捉えられるものであったように思われます。貴重な経験を与えて下さった教養研究センターの先生方に感謝を申し上げます。（文学研究科博士課程2年 佐藤章）

### 皆で支える居場所、火曜日のカドベヤ

横浜市中区石川町5丁目のオルタナティブ・スペース、「カドベヤ」を使って火曜日に「居場所」を運営し始めて2014年の6月で満4年がたちました。これを機会に満5年を目指していろいろな変化が意識的・無意識的に進んでいます。まず意識的な変化。それは参加者からきちんと参加費をもらうということ。寿地区からも常連の参加者が来てくれますが、困ったことはみなさんのお金の使い方です。生活保護費の支給は月初めなので、月末にはどうしてもお金が足りなくなってしまう。今までは、目をつぶってきましたが、やはり居場所はみんなで支えるもの。この6月からは参加費を毎回きちんと払ってもらうことにしました。少しでも浮いたお金は「カドベヤ基金」にして、将来の夢のために役立てよう。たとえば子供たちの笑顔のため。皆で開催するイベントのため。そんな思いが通じただけではなく、参加費を払うことで、皆のワークショップへのかかわり方も真剣になってきました。昨年に引き続き、8月は「親子企画」として、「フェルトで自分人形を作る」、「土人形を作る」の二つの企画を実現しました。土人形のワークショップでは今年も庄内から鶴渡川原人形伝承の会のメンバーお二人が案内人として来てくださり、30名もの参加者が小さなカドベヤに集まりました。今年は「熊踏み金時」、つまり金太郎の小さな土人形の絵付けを行いました。作業をしながら、金太郎の伝承も学びつつ、手も口も耳も忙しいワークショップとなりました。今後は学生さんたちとも参加者への聞き取りをしながら、5年目に向けての居場所の成果をリサーチしていく予定です。(カドベヤのブログ <http://ameblo.jp/kadobeya2010/>) (横山千晶)

実施期間：8月28日(木)～8月31日(日) [3泊4日]

場 所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス他

参加人数：学部学生27名、院生2名、社会人1名、  
スタッフ6名 合計36名

講 師：井奥洪二(経済学部教授)、鈴木正崇(文学部教授)、  
酒井忠久(致道博物館館長)、  
東山昭子(鶴岡総合研究所研究顧問)

参 加 費：学部学生、大学院生：2,000円、社会人：10,000円

\* 現地までの往復交通費は自己負担(現地集合・現地解散)  
宿泊場所：休暇村羽黒(鶴岡市)

### 【関連企画】

- ・学生健保主催の朝食サービスで生協の協力により庄内米の提供(6/9～13)
- ・日吉メディアセンターと生協との協力で庄内関連図書とパネル展示(6/9～7/12)

### スケジュール

1日目	・現地集合(鶴岡市 TTCK) ・「生命」に関するマインドマップ1作成 ・「即身仏—身体を考える」講師：井奥洪二(経済学部教授)
2日目	・即身仏拝観(注連寺) ・松ヶ岡開墾場見学 ・庄内藩校致道館で庄内論語の素読 ・鶴岡市内見物 ・「庄内文化論」講師：酒井忠久(致道博物館館長)、 東山昭子(鶴岡総合研究所顧問)
3日目	・ミニ修験体験 ・「羽黒修験」講師：鈴木正崇(文学部教授)
4日目	・慶應義塾大学先端生命科学研究所見学 ・マインドマップ2作成 ・懇親会 終了後現地解散

(日水邦昭)



# 研究サポート「研究の現場から」

## 〈第10回〉感情と社会形成—スピノザを手がかりに

本報告では、感情と社会的紐帯との関係を、スピノザに即して考察しました。まず、能動／受動という座標軸について解説したうえで、その軸にそって感情の理解を試みました。多くの思想家が理性や意志に能動性を、情念や身体に受動性を見るのとは対極的に、スピノザの特徴は、感情の中にも受動感情から能動感情へのグラデーションを見いだしたことです。前者はより占有されうるものを求め（恋人、財産や地位など）、後者はより共有されうるもの（平和や知的愛など）を求めるとい違いがあります。受動感情も穏和さや従順、恐怖、そして感情の模倣などによって社会を基礎付けうるが、能動感情による共同性は、より強固な安定したものとなることを示唆しました。（川添美央子）

## 〈第11回〉イスラーム美術と日本—染織品と漆器を中心に

私はイスラーム美術史を専門としています。江戸時代には、ペルシアやインドで作られた絹織物や絨毯などが日本にもたらされましたが、それらは日本の工芸品にどのような影響を与えたのでしょうか。鍵となるのが、イスラーム圏では広く装丁や絨毯のデザインとして用いられるメダイオン文です。このメダイオン文が赤穂緞通をはじめとする日本産絨毯や、江戸末期から明治にかけての讃岐漆器のデザインとして摂取されていることが分かってきました。福澤諭吉の遺愛品に、讃岐漆器の名手である藤川蘭齋によるメダイオン文の硯箱があることも新たに判明しました。日本の工芸品にメダイオン文が摂取された背景もあわせて、研究内容をご紹介します。（鎌田由美子）

## 第12回「研究の現場から」——研究と人の交差点——

教員の交流の場としてスタートした円卓サロン「研究の現場」は、今回で12回目を迎えます。今回は、理工学部の小林拓也先生と文学部の藤谷道夫先生にお話いただくことになりました。日頃なかなか学部横断の交流がなく寂しく思われている方、自分ではちょっと手が出ないけど興味ある分野の先生の刺激的なお話に興味のある方、なんとなく、おいしい飲み物、食べ物でほっと一息つきたい方、どんな方も大歓迎です。予約は不要です。ふらっとお立ち寄り下さい。（篠原俊吾）

12月15日（月）18:15～ 来往舎101教室にて

・小林拓也（理工学部）

「私の研究紹介：ルソー、スイス、フランス語教育」

・藤谷道夫（文学部）

「ダンテ『神曲』の数的構成について」

## 〈第10回〉D・H・ロレンスのworkにおけるworkについて

ロレンスはイングランド中部を舞台にして工業化する社会を主要な作品に描きましたが、工業化の現実との対峙によって、作品は重要な変化を遂げました。今回の報告では、ロレンスの転機をなしたと言われる小説『恋しい息子たち』のために書かれた思弁的で難解な「前書き」を分析し、肉体と言葉の二項対立を変奏しつつ展開される議論の根柢には“work”＝労働／作品のテーマがあることを指摘しました。つまりこの「前書き」は、工業化によって甚大な影響を受ける人間活動の基本である労働について議論し、同時に作家として作品を書くという労働のあり方にまで射程をのばした意義深い文章であり、歴史的状況との対峙の産物であると論じました。（近藤康裕）

## 〈第11回〉客観性について—ラトウールの科学論を手掛かりに

主観／客観という二項対立は、一見自明のようですが、歴史的に見ると近現代に特有のものであり、語源的な意味（subjectum / objectum）から大きく振じれた状態にあります。私たちが何かを客観的であるとみなして、それに論証的な力を認めるとき、もしかすると私たちは、意味の振じれによって見えにくくなっている部分に惑わされているのかもしれない。私は、「正当化される」ということと「正しい」ということが等価であると主張することで、客観性一般、特に科学的客観性と言われるものを、より望ましい仕方で受け止めることができると考えます。ブリュノ・ラトウールの科学論を手掛かりに、客観性について議論しました。（荒金直人）

## 注目！ 研究会助成制度

この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年2回1月と7月の月末に締め切ります。春学期の企画は1月、秋学期分は7月にご応募下さい。次回の締切は1月31日。詳細は教養研究センター事務室へどうぞ。

## 求ム・来往最前線情報！

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ（日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先）、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

**【日吉キャンパス公開講座】言葉と想像の翼**

10月4日(土)～12月6日(土) 全8回 16コマ  
3時限(13:00～14:30)、4時限(14:45～16:15)  
第4校舎J29番教室(11月29日のみJ14番教室)

**【学会・ワークショップ等開催支援】**

**シェイクスピア喜劇・ワークショップ「『から騒ぎ』で大騒ぎ」**

第一部 14:00～15:30、第二部 15:45～17:15  
11月1日(土) 第4校舎B棟13番教室  
11月2日(日) 来往舎大会議室

**【学びの連携プロジェクト】第2回：田村次朗  
交渉力体験ワークショップ ハーバード×慶應流交渉学**

11月8日(土) 13:00～16:00 第4校舎B棟22番教室

**第11回【研究の現場から】**

11月11日(火) 18:15～ 来往舎101教室 →特集V  
鎌田由美子(経在学部専任講師)  
「イスラーム美術と日本—染織品と漆器を中心に」  
荒金直人(理工学部准教授)  
「客観性について—ラトゥールの科学論を手掛かりに」

**【情報の教養学】第6回：河野武司  
計量テキスト分析のすすめ**

11月27日(木) 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

**【情報の教養学】第7回：平手勇宇  
ビッグデータがもたらす E-Commerce の変革**

12月3日(水) 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

**第12回【研究の現場から】**

12月15日(月) 18:15～ 来往舎101教室 →特集V  
小林拓也(理工学部専任講師)  
「私の研究紹介：ルソー、スイス、フランス語教育」  
藤谷道夫(文学部教授)  
「ダンテ『神曲』の数的構成について」

**【学びの連携プロジェクト】第3回：井庭崇  
パターン・ランゲージのワークショップ(仮)**

2015年1月24日(土) 予定

**【学会・ワークショップ等開催支援】  
ろう者と聴者が協働する手話言語学ワークショップ**

2015年3月7日(土)

11月

12月

2015

1月  
2月  
3月

秋に日吉キャンパスで開催している公開講座は「言葉と想像の翼」をテーマに、10月4日から12月6日の土曜日(10月25日、11月22日を除く)13時より、計16講義を予定しています。現代の社会では情報通信メディアが急速に普及し、「言葉」はこれまでは異なる意義を持つようになってきました。この状況は便利さや新たな交流を生み出すと同時に、「言葉」の生き生きとした力を失わせています。本講座では、文学、言語学、社会学、哲学、文芸評論、芸術、生物学、脳科学等の専門家に「言葉」と「想像力」を論じていただき、「人間とは何か」という根本問題をもう一度考えてみたいと思います。(納富信留)

**【学会・ワークショップ等開催支援】シンポジウム「東アジアにおけるイスラームの諸相—思想・美術・コレクション」**

11月9日(日) 14:00～17:00 来往舎大会議室

**【HAPP】Little Talks**

11月14日(金) 18:30～20:30

11月15日(土) 17:30～19:30

来往舎イベントテラス

**【学会・ワークショップ等開催支援】日吉电影节 2014**

11月29日(土) 13:00～ 独立館D101教室

12月3日(水) 14:40～ 来往舎シンポジウムスペース

**【HAPP】8Hands' Piano Performance**

12月9日(火) 18:30～19:15 来往舎イベントテラス

**【学会・ワークショップ等開催支援】ワークショップ「ジャン＝ピエール・デュビュイの思想圏—カストロフ、科学技術、エコノミー—」**

12月13日(土) 15:00～18:00 独立館2階201教室

**【HAPP】“塾長と日吉の森を歩こう”**

12月20日(土) 13:00～(予定) まむし谷(散策)

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】春学期開催分募集**

申請締切 2015年1月31日(土)

**【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】**

プレゼンテーション・コンペティション

2015年2月予定

\*各イベントへのお問い合わせは、[toiawase-lib@adst.keio.ac.jp](mailto:toiawase-lib@adst.keio.ac.jp)まで

私の<sup>マ</sup>ル<sup>マ</sup>ル<sup>マ</sup>ル<sup>マ</sup>遠距離痛働自慢

子供の小学校入学を期に、新宿から妻の実家である茨城県の中央に位置する田舎町に引越しし、そこから日吉まで片道3時間の遠距離痛働とマスオさん生活の始まりです。

なぜそんなところから、とよく問われますが、残念ながら妻の実家は資産家でもなく大地主でもありません。ごく普通の家庭です。ではどうして、ここでは愛する家族のためということにしておきましょう。朝は5時起床、歌舞伎の早変わりのように身支度をして車で最寄り駅に向かいます。始発駅に近く、まだ1車両数人の乗客、遠慮なく妻のおにぎりを頂きます。朝は使いものになりませんが、帰りの車中は唯一の読書タイムです。引越しをした当時、出かけに子供から「また来てね」と言われて落込んだこともありましたが、せっかくの田舎生活、点在する耕作放棄地を借用して週末農民としてデビューです。今では完全有機栽培の野菜や果樹で、健康と家計に貢献しています。最近、冬の朝晩の冷え込みは身にこたえますが、薪ストーブの煙突からゆらりと立ち昇る煙りを見上げるとホッとします。こんな遠距離痛働ですがまもなく終点です。(日水邦昭)



# MEMO

---

---